

ローマ人への手紙3章1-20節「神の断罪」

1A 神の公正 1-8

1B 責任としての優位 1-2

2B 人の偽り 3-8

2A 人の墮落 9-20

1C 状態 9-18

2C 結果 19-20

本文

ローマ人への手紙3章です。ローマ人への手紙のテーマは、「信仰による義」です(1章17節)。神が義であられ、そしてその神を信じる者が、その信仰のゆえに義と認められるというものです。そこで知らなければいけない初めの事は、「人は義と認められない」ということです。誰もが神の前でその怒りから免れることは言い逃れができない、という、なぜ神が信仰による義を与えておられるのか、その前提になっている話があります。それが1章18節からありました。

神を知らないから、仕方がないだろう、という人々には、神が自然界においてご自身を啓示されている、だから弁解の余地はないと教えました。そして次に、自分はそのような罪を犯していないとする、自分を正しいとする人々に対する言葉をパウロは2章で論じています。実は、状況を少し変えれば、他者を見つめるその物差しは自分自身にも当てはまることを述べました。そして、律法すなわち聖書を持っていなくても、良心が責められるということは、神の与えられた啓示に応答していないということを述べています。

パウロは、人が頑なになっていて、その目に見えるところで判断しているところから、福音というのは、心の動機、そして隠れて行なっていること、そうした内側の自分のありのままの姿が、神の前で裁かれることを述べています。つまり、ごまかせないのです。(2章16節)

そして今度は、ユダヤ人に対してははっきりと述べます。律法を持っていることが彼らを正しくしているのか？ということ。その筆頭である教師たちが、律法を良く知り教えているから、救いは保障されているのかというと全くそうではないことを論じています。なぜなら、他人を教えているけれども自分を教えていない、教えていることに違反することを自分自身が行っているからです。ですから、私たちが聖書を知っているから義とされているのではない、ことを知りたいですね。そこに書かれていることを信じて、その信仰が行いに現われているところに、初めて意味があります。

そしてユダヤ人によって、もう一つユダヤ人足らしめるものがありました。それは「割礼」です。

神がアブラハムを選ばれ、アブラハムの子孫からユダヤ人を生み出されました。そして、アブラハムに対して、その契約の印として割礼を与えられました。ユダヤ人がユダヤ人であることを示す、誇りとなっていました。しかし、それはあくまでも内側の心の一新がされているからこそ、外側の印であり、割礼を受けているからといって救いを保障するものではない、ということです。むしろ内側のユダヤ人こそがユダヤ人であり、割礼の有無ではないと論じたのです。ここもクリスチャンも同じで、水のバプテスマはその人の古い人が死んで、キリストがよみがえられたように、新しい人になって生きていることを公に示す儀式です。ですから、バプテスマを受けても生活が変わらなければ、その人が本当に救われているのかどうか、分からないのです。

1A 神の公正 1-8

そうすると、ユダヤ人としては、ユダヤ人がユダヤ人であることの意味はいったい何なのか？ということになります。パウロは先から、異邦人にもユダヤ人にも全ての人が、という言い回しを使っていました。そこでそうしたユダヤ人の疑問に答えるところから、3章が始まります。

1B 責任としての優位 1-2

3:1 では、ユダヤ人のすぐれたところは、いったい何ですか。割礼にどんな益があるのですか。

3:2 それは、あらゆる点から見て、大いにあります。第一に、彼らは神のいろいろなおことばをゆだねられています。

パウロは、ユダヤ人とギリシヤ人には差別がないこと話していますが、それは、ユダヤ人が選ばれた民であることを否定するものではありません。パウロは、「あらゆる点から見て、大いにあります。」と言っています。9章において、ユダヤ人のさまざまな利点を列挙しています。「彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法を与えられることも、礼拝も、約束も彼らのものです。先祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。(9:4-5)」

そして、パウロは、この3章においては、みことばをゆだねられたことを、ユダヤ人がすぐれていることの第一の点として挙げています。旧約聖書はもちろんのこと、新約聖書のほとんども、ユダヤ人が聖霊に動かされて書いたものです。ユダヤ人が選びの民であることを知る、驚くべきことの一つに聖書の保持があります。当時はもちろん写本を手書きでしていたのですが、旧約聖書の写本は紀元後九百年ぐらいのものでした。ところが 1947 年に死海写本が発見されました、紀元前二百年ぐらいのものでした。驚くことは死海写本自体ではないのです、千年以上の開きがあるのにその変化、違いがほとんど皆無であったということです。それだけ間違いなく書き写したということにあります。私たちであれば、「考えさえ伝わっていれば、それでいいではないか。」と思いますが、イエス様が言われたように「律法の中の一点一画もすたれることはありません。(マタイ 5:18)」なのです。

パウロは、神のことばの重要性を知っていました。そして後で、ゆえにユダヤ人が神の言葉に照らして罪と定められるという論理を展開させていきます。

2B 人の偽り 3-8

3:3 では、いったいどうなのですか。彼らのうちに不真実な者があつたら、その不真実によって、神の真実が無に帰することになるでしょうか。3:4 絶対にそんなことはありません。たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです。それは、「あなたが、そのみことばによって正しいとされ、さばかれるときには勝利を得られるため。」と書いてあるとおりです。

ここからの議論は言わば、「追い詰められた人たちの論法」と言ったらよいでしょう。パウロは、弁解の余地がないように論じました。神を知らないという人には、「いや、神を知っている」と論じ、「私はそんな悪いことをしていない」とする人には、「あなたは同じことをしている」と論じ、「私には正しい神の言葉があるし、割礼も受けた」と言う人には、「内面が大事であり、外側の義は義と認められない。」としました。こうして、言い訳することができない、逃げ道がないようにしたのです。そこで人が行なうことは「責任の転嫁」です。自分を正しくするために、なんと神に非を着せようとしています。神が不義であるという論法に持ってくるのです。それに答えるのがここからの議論です。

神が、イスラエルを世界の光とするために、ご自分の証人とするために選ばれたのに、彼らはそうならなかった。ならば、神が言われたことは嘘だったではないか？というのが初めの主張です。神が不真実なのではなく、彼らが神に対して真実を尽くさなかったのです。仮に、主が来られて、誰一人としてイエス様を信じなかったとしましょう。それで救いをもたらすと約束されたのに、だれも救われなかったとしましょう。けれども、そのために死ぬのは受け入れなかった者たち全員であり、それでイエス様の真実が無効にされるわけではありません。それと同じです。例えば、多くの人が、「私は、イエス・キリストが自分の救い主だとは受け入れない。私は神を信じない。」と言ったからと言って、神がいなくなったり、イエス・キリスト以外に救いの方ができたりするでしょうか。ある人がパントマイムで福音を伝える劇を路傍で行いました。イエス様を演じ、受け入れる人と拒む人のそれぞれを演じる人もいます。拒む人がイエス様から背を向けるのですが、イエス様はイエス様で存在しているのです。イエス様の真実は変わらず、変わるはその人の運命です。永遠の命ではなく、永遠の滅びに至ります。

イスラエルに対しては、神の真実はその裁きに現われていました。イスラエルは偶像を拝み、それゆえ、神はイスラエルをさばき、バビロンなどに捕え移されました。神の正しさが、彼らの不義によって明らかにされたのです。

3:5 しかし、もし私たちの不義が神の義を明らかにするとしたら、どうなるでしょうか。人間的な言い方をしますが、怒りを下す神は不正なのでしょうか。3:6 絶対にそんなことはありません。もしそ

うだとしたら、神はいったいどのように世をさばかれるのでしょうか。

神の正しさが、彼らの不義によって明らかにされたのです。ならば、イスラエルが神の義を明らかにしたのに、イスラエルをさばくのはおかしいではないかというのが、ここでの主張です。けれども、これは、あまりにもばかっています。例えば、泥棒を捕まえる警官に対し、社会の中における警察の必要性が明らかになったのだから、泥棒を捕まえたことは間違っているだろう、ということを行っているのと同じことだからです。けれども、そうしたら警官が泥棒を捕まえることはできなくなるし、同じように、神が世をさばくことができなくなります。

3:7 でも、私の偽りによって、神の真理がますます明らかにされて神の栄光となるのであれば、なぜ私がなお罪人としてさばかれるのでしょうか。3:8 「善を現わすために、悪をしようではないか。」と言ってはいけのでしょうか。・私たちはこの点でそしられるのです。ある人たちは、それが私たちのことばだと言っていますが、・もちろんこのように論じる者どもは当然罪に定められるのです。

「善を行なうために、悪をしようではないか」という類いの議論が、もっとも悪質なものです。罪からの救いのための、神の恵みなのに、その教えを、罪をますます行なう根拠にしていきます。しかし、このことについて、パウロは、しばしばそしられていました。神の恵みによる、信仰による救いを語り継げるなかで、それでは、放縦な生活をしてよい許可を与えているのではないかと人々が思ったのです。しばしば極悪人であった人、刑務所に入ったことのあるような人がイエス様を信じて、救われます。これはすばらしい神の恵みの証しです。ならば、その恵みが現われるために、その悪いことをしようではないか、という論法です。けれども、人間の堕落した性質は、それさえも正当化しそうなものを持っています。「神の恵みが現われるために、罪を犯してもいいでしょう。」恐ろしいことですが、実際にあります。神の恵みは、罪から救われるためにその真理があります。

パウロは、このような議論をすることそのものが神への冒瀆であり、神に罰せられるとパウロは言っています。

2A 人の堕落 9-20

そこでパウロは結論を出します。

1C 状態 9-18

3:9 では、どうなのでしょう。私たちは他の者にまさっているのでしょうか。決してそうではありません。私たちは前に、ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです。

パウロは、もともとの質問にふたたび戻ります。それでは、ユダヤ人はすぐれているのか、とい

うことです。ユダヤ人は、神のおことばをゆだねられている点においてははすぐれていても、神の前に正しいことを行なっているかどうかの点においては、まったく異邦人と変わらないのです。「私たちは前に、」とパウロが言っていますが、すでに1章と2章において、異邦人もユダヤ人も神のさばきを受けなければならないことを語りました。そこで、パウロは、聖書から、私たちがいかに墮落しているか、その姿を示します。

3:10 それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。ひとりもない。3:11 悟りのある人はいない。神を求め人はいない。3:12 すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。」

これは、厳然とした言葉です。そうは思いたくない人間であります、実際はこうなのです。私たちは、人々が行なう善行を見て、「あの人は正しい人だろう。」と思います。けれども、聖書は、神の前にはだれも善を行なっていません。さらに、神を求めてもいません。宗教活動を見て、「あの人は、あれほど熱心に祈っているから、神はよく見てくださるだろう。」と思います。いいえ、その中に偽善や独善が存在しています。

そしてパウロは、どのように人間が墮落しているかを、体の器官の中に見ることができるとしています。つまり、口と、足と、目です。

3:13 「彼らののどは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。」「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、」3:14 「彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」

口によって、人は欺きます。それはまむしの毒のようになり、人を傷つけ、人を実際に殺してしまうほどの力を持っています。心から出ることにはこうした汚れたものであり(マルコ 7:20-23)、人殺しをするほどの力のあるものなのです。ヤコブもこう言いました。「舌は火であり、不義の世界です。舌は私たちの器官の一つですが、からだ全体を汚し、人生の車輪を焼き、そしてゲヘナの火によって焼かれます。(ヤコブ 3:6)」

3:15 「彼らの足は血を流すのに速く、3:16 彼らの道には破壊と悲惨がある。3:17 また、彼らは平和の道を知らない。」

私たちの行動について語っています。心からでたものは言葉だけではなく、行動によって罪を行ないます。事実、アベルの兄カインは、まず神に対して怒り、次にアベルを心の中でねたんだため、殺人行為に移ったのです。

3:18 「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」

私たちの一つ一つの行動や決断は、神への恐れによって正しい道へと導かれます。ヤコブの息子ヨセフは、ポティファルの妻に、「私といっしょに寝ておくれ。」とせがまれたとき、こう答えました。「ご主人は、この家の中では私より大きな権威をふるおうとはされず、あなた以外には、何も私に差し止めてはられません。あなたがご主人の奥さまだからです。どうして、そのような大きな悪事をして、私は神に罪を犯すことができますでしょうか。(創世 39:9)」ヨセフの目の前には、神に罪を犯すことはできないという、神への恐れがありました。けれども、私たちはみな、そのような恐れをもたないため、悪事に走るのです。

2C 結果 19-20

3:19 さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。

パウロが 10 節から語っていたものは、すべて詩篇やイザヤ書など、ユダヤ人が自分の聖書だと言っているものからです。これらは、第一にユダヤ人に対して語られていたものでした。「律法」と言っていますがこの文脈では必ずしもモーセ五書ではなく、旧約聖書全般を話しています。ですから、異邦人だけでなくユダヤ人も含めて、全世界が神のさばきに服するのです。

3:20 なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。

ここがとても大事な箇所です。ここがユダヤ人だけでなく、私たち人間が行ってしまっていることなのです。何とかして、決まりや律法によって神の前に義と認められようとするのです。そして、私たち信仰を持っていると言われている者たちも、行ないによる義をどうしても求めてしまいます。しかし、福音を知るにはこの部分をしっかりさせないといけません。律法によっては、義と認められるのではなく、罪の意識が生じるのだということです。したがって常に、隣り合わせにキリストの流された血があり、贖いがあり、赦しがあり、恵みがあります。十字架から卒業することは、決してありません。天のエルサレムでも、小羊、すなわち十字架に付けられたキリストがほめたたえられています。人は義ではない、神こそが義である、そして神の義を身に付けることによってのみ、その恵みによってのみ私たちは義なるものとして神の前に出ることができる、という真理です。